

子どもの身長を伸ばす成長ホルモンは、大人にとっても必要不可欠なものだ。しかし脳の下垂体かすいたいにできる腫瘍しゅようなどが原因で、必要な量の成長

ホルモンが分泌されなくなることがある。このため引き起こされるさまざまな病態を「成人成長ホルモン分泌不全症」という。

鹿児島県に住む自動車整備士の川辺保敏さん（仮名・48歳）は、11年ほど前、妙にからだが疲れやすくなった。朝礼時の体操が苦痛にな

り、以前はまったく平気だった長時間の立ち仕事がつらく感じるようになった。そのため、休みの日は寝て過ごすことが多くなった。

せいじんせいちようほるもんぶんぴつふぜんしょう

# 成人成長ホルモン 分泌不全症



ありた かずのり  
有田和徳医師  
鹿児島大学病院  
脳神経外科部門科長  
鹿児島市桜ヶ丘8-35-1  
099-275-5111



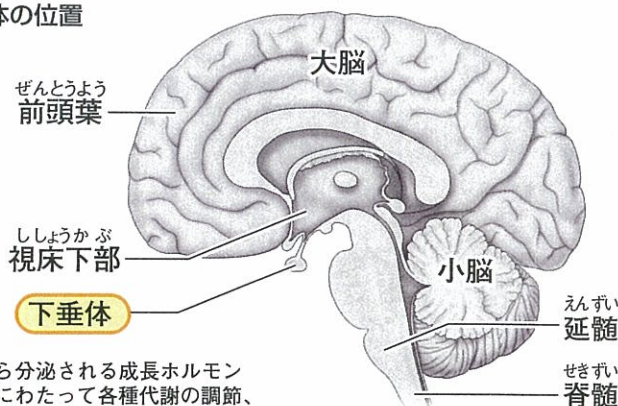
ひづかなおみ  
肥塚直美医師  
東京女子医科大学病院  
内分泌内科  
東京都新宿区河田町8-1  
03-3353-8111

成長ホルモンがつくりやすくなり、研究進む  
特定疾患認定で、補充療法の費用負担減へ

ある日、運転免許更新のため目の検査を受けた川辺さんは、視野の外側が見えにくい「視野欠損」に気づき、近くの眼科を受診。脳の病気がいわれたため、鹿児島大学病院の脳神経外科を紹介され受診したところ、MRI（磁気共鳴断層撮影）検査で下垂体の部分に大きさ2センチの腫瘍（▼192ページ）が発見された（頭蓋咽頭腫）。下垂体は重要な数種類のホルモンが分泌される内分泌器官なので、ホルモン分泌検査を必ずする。その結果、性腺刺激ホルモン、甲状腺刺激ホルモン、成長ホルモンの分泌が低下している「下垂体機能低下症（下垂体が分泌する複数のホルモンの分泌低下が起こった状態）であることがわかった。

2001年10月に開頭法により腫瘍はほぼ摘出された。川辺さんの視野の障害

■下垂体の位置



下垂体から分泌される成長ホルモンは、生涯にわたって各種代謝の調節、各器官の機能維持に大きく寄与する

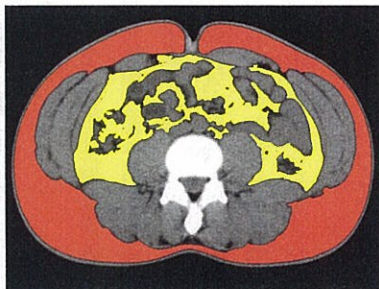
■成人成長ホルモン分泌不全症のおもな症状

体組成の異常	体脂肪増加（内臓脂肪型肥満）、除脂肪体重の減少、筋量低下など
代謝障害	耐糖能異常（耐糖能＝上昇した血糖値を正常に戻す力）、脂質異常症（高脂血症）、高血圧、骨粗しょう症、動脈硬化症など
QOL（生活の質）の低下	意欲の低下、体力・運動力低下、情緒不安など
長期予後	心・血管疾患リスクの増加

■治療前 内臓脂肪(100%)



■治療25カ月 内臓脂肪(33%に減少)



27歳男性のへその位置で撮影したCT画像（内臓脂肪を黄色で表示）。治療後、劇的に内臓脂肪が減っているのがわかる

は改善したが、新たに副腎皮質刺激ホルモン分泌低下が起こったため、手術後は生命維持に不可欠な副腎皮質刺激ホルモンと甲状腺刺激ホルモン補充療法が開始された。手術後3カ月目、わずかに残った腫瘍の進行をコントロールするガンマナ

イフ治療（放射線治療の一種。病変部にガンマ線をピンポイントで照射する）がなされ、04年からは男性ホルモンの補充療法も開始された。川辺さんは仕事に復帰したが、朝なかなか起きられない、集中力が持続しない、仕事後もひどい疲労感が

残る、などの状態が続いた。そして、食事は量を増えていないのに、手術前には65kgだった体重は78kgに増加、健診では中性脂肪の値を指摘され「メタボリックシンドロームに近いので注意が必要」と言われた。腹部CT（コンピュータ

食事にならなくても  
メタボなからだに

ター断層撮影）検査では、内臓脂肪の蓄積と脂肪肝が見つかった。成長ホルモンは大きく分けて二つの作用がある。一つは子どもの身長を伸ばす「成長促進作用」、もう一つは、からだを維持する「代謝調節作用」だ。代謝とは、物質を変化させてエネルギーをつくり出したり、骨や筋肉などの体組成の材料をつくったりすること。成長ホルモンは、成人の体脂肪を分解したり筋肉や骨量を増やしたりするが、代謝調節作用が働く分量が分泌されないと、若くて規則正しい生活を送っていても、写真左上のような、まるでメタボリックシンドロームのような不健康なからだになってしまう。

脳神経外科部門科長の有田和徳医師は、川辺さんの成長ホルモン分泌不全が治療対象となる重度のものであるかどうかを調べるため、成長ホルモン分泌刺激試験（刺激物質投与後の分泌量で診断）をし、さらに成